

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 356 回 日本語だから解る！ 「change」のレベル

2010.3.21

「変わること」「変えること」...、2010 年はずっと、そんなことを考えてきた。決して言葉遊びをする訳ではないが、「change」を意味する日本語が沢山あるのに、驚いている。普段我々は、その意味を正確に理解せず、曖昧なまま使ってきたように思われる。いや、少なくとも自分自身、そうだったに違いない。根が真面目な小生、何としても整理しておきたくなった。

まず、「**変更**」という言葉がある。「変更」とは、「今までの考え方、やり方を変えないで新しいことだけ、できることだけをつけ加えること」と意味づける。これでは、結果はほとんど変わらない。しかし、痛みも伴わない。実務的にすこぶる無難(ぶなん)な「change」である。でも、この「変更」レベルの企業や店舗は多い。「変更」は最低限、「change」の始まりかもしれない。

その「変更」に目的を持たせた意味が「**改革**」、現状を変えていくことにより良い未来を目指す、基盤は維持しつつ、社会制度や機構・組織などをあらため、変えること。

そして「**変化**」とは、「change」の総体的な意味かもしれない。恐らく「change」=「変化」なのだろう。でも日本語の「変化」は若干ニュアンスが違う。字の如く“化ける”ということ。化けるまで変えるということ。つまりは、今までの考え方や行動を“化ける”まで変えるということである。しかし、これはえてして痛みを伴う。だから、あまりやりたがらない。「変化しろ」とは、みんな言う。でも「変更レベル」を変化と言ってしまふ。“化ける”までやる、これが変化であることに恐れているようだ。そして、その具現化した言葉が「**改新**」、「**革新**」、古いものを改めて、全く新しくすることかもしれない。「大化の改新」という歴史も昔、教わった覚えがある。

さらに「**変革**」。「変革」とは、「過去の成功体験を 100%否定し、破壊し、全く違った価値観を新しく創りあげていくこと」。これは「**トップ**」しかできない。過去の成功体験を捨てることはすごく怖い。そして、「否定から入る」こと故に、抵抗がある。特に、経営者や指導者は皆、過去の歴史をつくってきた人達...。だから、この「変革」は難しい。

やがてこれは、いわゆる「**革命**」あるいは「**維新**」という言葉になる。つまり「革命」は、理想の未来の実現の為に現状を否定し、全てをぶち壊し基盤を変えていく、既成の制度や価値を根本的に変えてしまうこと。「**維新**」も全てのことが改められて、すっかり新しくなることと意味されている。実に日本的言葉で、「維(これ)新なり」の意、そう明治の「**ご一新**」(明治維新)である。

「変更」「改革」「改新」「革新」と「変革」「革命」「維新」の違いは、基準を「今まで」に置くか、「未来」に置くかの問題といえるかもしれない。でも、結局これらは全て「変化」に違いない。

いよいよ、理屈っぽくなってきたが、「change」の一言が、日本語になるとこれほど多くの言葉を生み出すこととなる。これらは無意味、無節操にあるわけではなく、まさに「change」の段階、つまりレベルを表していると思う。

とにかく「change」しなければならないことは分かっている。変更か、改革か、はたまた革命だったのか、自分がどの変化レベルを目指していたのか、冷静、かつ客観的に評価すべきかもしれない。たぶんそれが、今の自分の意欲とパワー、それによって、色々なポジションが決まってしまうこと、後で知ることになる。

(参照：<http://akindonet.exblog.jp/11839192/> & <http://homepage1.nifty.com/taima/yomoyama/yomo168.htm>)